朱子語類讀書法篇譯注（七）

興膳　宏　京都大學
木津祐子　同志社女子大學
齋藤希史　奈良女子大學

130　今人讀書未多、義理未至融會處、若便去看史書、考古今治亂、理會制度典章。譬如作陂塘以漑田、須是陂塘中水已滿、然後決之、則可以流注滋殖田中禾稼、若是陂塘中水方有一勺之多、遽決之以漑田、則非徒無益於田、而一勺之水亦復無有矣。讀書既多、義理已融會、胸中尺度一一已分明、而不看史書、考治亂、理會制度典章、則是猶陂塘之水已滿、而不決以漑田。若是讀書未多、義理未有融會處、而汲汲焉以看史爲先務、是猶決陂塘一勺之水以漑田也、其涸也可立而待也。廣。以下讀史。

近頃の人は、經書をあまり讀まず、義理もしっくり理解するまでにはなっていない。それではや史書を讀みにかかって、古今の治亂を考え、制度典章を扱おうとすると、譬えば、ため池を作って田畑に水をやるのに、ため池を滿水にしてから放水すれば、田畑の作物にたっぷり水を注いで育てることができるが、ため池の水がやっと一すくいぐらいで、急いで放水してしまうと、田畑に何の益にもならないばかりか、その一すくいの水も無くなってしまうようなものだ。經書を十分讀んで、義理もしっくり理解し、胸中の尺度も一つ一つ皆はっきりしているのに、史書を讀んで治亂を考え、制度典章に取り組もうとしなければ、ため池に水は滿ちているのに、放水して田畑を潤そうとしないようなものだ。讀書がまだ多くなくて、しっくり理解するに至らないうちに、汲々としてまず史書を讀もうとするなら、それは、ため池の一すくいの水を灌漑に使うようなもので、水はたちまち涸れてしまう。輔廣記す　以下史を讀むことを論ず。

（校勘）朝鮮古寫本　末尾の、「以漑田也、其涸」部分が脱落し、空白となる。

（注）「陂塘」は、ため池のこと。「陂塘汙庳、以鍾其美」（『國語』周語下、韋昭注「畜水爲陂、塘也」）

「滋殖」は、ふやすこと、生長させること。「孝惠・高后之間、衣食滋殖。」（『漢書』食貨志上）

「融會」はすみずみまで行き渡ること。「看文字、不可恁地看過便道了。須是時復玩味、庶幾忽然感悟、到得義理與踐履處融會、方是自得。這箇意思與尋常思索而得、意思不同」（「朱子二　論自注書　孟子要指」一〇五・2631）

「一勺之水」は、ほんの少量であることのたとえ。「積一勺以成江河、累微塵以崇峻極」（『晉書』虞溥傳）

本條と同様、學問を田畑に水をやることにたとえる例は、上篇50條にも見える。また、『朱子讀書法』卷一「循序漸進」に、冒頭から「而不決以漑田」までとほぼ同じ文が見える。「今人讀書未多、義理未至融會、便去看史、考古今治亂、理會制度典章。譬如作陂塘以漑田、須是陂塘中水已滿、然後決之、則可以流注滋殖田中禾稼、若是陂塘中水方有一勺之多、遽決之以漑田、則非徒無益於田、而一勺之水亦無矣。讀書既多融會、胸中尺度已分明而不看史、考古今治亂、理會制度典章、則是陂塘之水已滿矣、而不決以漑田也。」

131　先看語孟中庸、更看一經、却看史、方易看。先讀史記、史記與左傳相包。次看左傳、次看通鑑、有餘力則看全史。只是看史、不如今之看史有許多嶢崎。看治亂如此、成敗如此、與治同道罔不興、與亂同事罔不亡、知得次第。節。

まず、『論語』『孟子』『中庸』を讀み、さらに一つ經書を讀んでから史書を讀めば、讀みやすい。（史書では）まず『史記』を讀むこと。『史記』は『左傳』と重なり合う。それから『左傳』、それから『通鑑』、餘力が有れば、正史すべてを讀む。ただし史書を讀むには、いまの史書を讀む者が、あれこれややこしく考えるようなことはないのだ。治亂はこうこう、成敗はこうこうと讀んでいくと、「治と道を同じくすれば興らざるはなく、亂と事を同じくすれば亡びざるはなし」というわけで、ことの次第がよく解る。甘節記す

（注）「不如」は、一般には「～の方がよい」という意味で用いられる。「不如」をその意味に解釋すれば、「史書だけを讀むのであれば、いまの史書を讀むときに、あれこれ項目を枝別れさせて讀むほうがまだよい」ということになろう。但し、上の譯は一應のものに過ぎない。

「嶢崎」は、下篇33條および88條に既出。

本條は、四書をまず『論語』『孟子』『大學』『中庸』の順に讀むように訓える。讀書の順序については、下篇91條の注を參照されたい。そこにも擧げた通り、「大學一　綱領」（一三・

249～250）に同じ問題が再三にわたって論じられる。本條以降は、史書を讀む順序について論じられる。

「與治同道罔不興、與亂同事罔不亡」は、『尚書』太甲下に見える語。

『左傳』について『語類』では次のように語られる。

「春秋之書、且據左氏。當時天下大亂、聖人且據實而書之、其是非得失、付諸後世公論、蓋有言外之意。」（「春秋　綱領」八三・2149）

「左氏之病、是以成敗論是非、而不本於義理之正。嘗謂左氏是箇猾頭熟事、趨炎附勢之人」（「春秋　綱領」八三・2149）

「……呂伯恭愛教人看左傳、某謂不如教人看論孟。伯恭云、恐人去外面走。某謂、看論孟未走得三步、看左傳底已走十百步了。人若讀得左傳熟、直是會趨利避害。然世間利害、如何被人趨避了。」（「春秋　綱領」八三・2150）

『朱子讀書法』巻三「循序漸進」には、經書や史書を讀む順序を論ずることばが多く記錄されるが、本條の冒頭から「有餘力則看全史」までとまったく同じ言が見える。さらに「讀書須是先以經爲本、而後讀史」、「答潘叔昌書曰、看史但欲通知古今之變、又以觀其所處理義之得失耳」と、本條に通ずることばもみえる。

132　今人只爲不曾讀書、祇是讀得粗書。凡讀書、先讀語孟、然後觀史、則如明鑑在此、而妍醜不可逃。若未讀徹語孟中庸大學、便去看史、胸中無一箇權衡、多爲所惑。又有一般人都不曾讀書、便言我已悟得道理、如此便是惻隱之心、如此便是羞惡之心、如此便是是非之心、渾是一箇私意、如近時祧廟可見。杞。

近頃の人は書物をちゃんと讀まなくて、もっぱら大ざっぱな讀み方ばかりしている。およそ書物を讀むには、まず『論語』『孟子』を讀んでから史書を見れば、明鏡が手元にあるようなもので、美醜は殘らず映し出される。もし『論語』『孟子』『中庸』『大學』も讀みこまぬうちに史書を讀めば、胸中に何も判斷の基準が無いので、惑わされることが多い。また、ろくに讀書もせずに、「わたしは道理を悟った、惻隱の心はこうこう、羞惡の心はこうこう、是非の心はこうこう」などという輩がいるが、そんなものはみな自分勝手な考えだ。近頃の始祖の祭の問題はそのいい例だ。李杞記す

（校勘）朝鮮古寫本　本條を缺く

（注）「祧廟」は、遠祖を祭ること。『禮記』祭法「天下有王、分地建國、置都立邑、設廟祧壇墠而祭之。乃爲親疏多少之數、

是故王立七廟、……遠廟爲祧、有二祧、享嘗乃止」、『漢書』王莽傳「建郊宮、定祧廟」。なお、祧廟に關する議論が北宋以來繰り返し行われていたことが「禮七　祭」(九〇・2305～2306)に詳しく見える。

「渾是」はすべて。「以此見孔子渾是天理」(「論語二十六憲問篇」四四・1138)

「私意」は、下篇63條・73・89條條などに既出。

133　問讀史之法。曰、先讀史記及左氏、却看西漢東漢及三國志、次看通鑑。溫公初作編年、起於威烈王、後又添至共和後、又作稽古錄、始自上古。然共和以上之年、已不能推矣。獨邵康節却推至堯元年、皇極經世書中可見。編年難得好者。前日周德華所寄來者亦不好。溫公於本朝又作大事記。若欲看本朝事、當看長編。若精力不及、其次則當看國紀。國紀只有長編十分之二耳。時舉。

史書を讀む方法を問うと、いわれた。「まず『史記』と『左傳』を讀み、それから『漢書』『後漢書』と『三國志』を讀み、次に『通鑑』を讀む。司馬溫公が最初編年を作ったときは、周の威烈王から書き起こし、あとで共和の後まで書き加えたのだ。また『稽古錄』を作るに際しては、上古から書き始めているが、共和以前の年代は、すでに推し測れなかった。ただ、邵雍だけは、堯の元年までさかのぼっていて、これは『皇極經世書』に見られる。編年史は良いものが得難い。このあいだ、周德華がよこしたものもやっぱり良くない。司馬溫公は、本朝についてまた、『大事記』を作っているが、本朝のことを知りたければ、『通鑑長編』を讀むべきだ。そこまで力が及ばないのなら、次善の策として『國紀』を讀めばよい。『國紀』は『長編』の十分の二の量に過ぎない。潘時舉記す

(校勘)　朝鮮古寫本　問讀史之法、曰→問讀史之法、先生曰　西漢東漢→東漢西漢　始自上古→如自上古　共和以上之年→共和已上之年　十分之二耳→十分之一耳

(注)　「共和」とは、周の厲王から宣王に至るまでの十四年間をいう。共和元年は紀元前八四一年になるが、中國における正確な紀年の始まった年とされる。

『長編』は、『續資治通鑑長編』のこと、李燾撰、『郡齋讀書志』卷五には九百四十六卷、『直齋書錄解題』卷四には百六十八卷と記される。

『國紀』は徐度撰、五十八卷。『直齋書錄解題』卷四に「其書詳略頗得中、而不大行於世。」とある。

「邵康節」は、邵雍のこと。『宋史』巻四百二十七「道學傳」に傳が見える。『皇極經世書』十二巻はその著書。『直齋書錄解題』巻九子部儒家類に、「自帝堯至於五代、天下離合、治亂興廢、得失邪正之迹、以天時而驗人事、以陰陽剛柔窮聲音律呂、以窮萬物之數」とある。

『稽古錄』は司馬光撰、二十巻。「起自三皇、止本朝英宗治平末。至周共和庚申、始爲編年。」(『郡齋讀書志』巻五)

『大事記』は、元來は『稽古錄』の末尾に付されたもののこと。呂祖謙撰の同名の著作ではない。「溫公亦作本朝大事記、附稽古錄後」(「訓門人五」一一七・2813)

134 史亦不可不看。看通鑑固好、然須看正史一部、却看通鑑。一代帝紀、更逐件大事立箇綱目、其間節目疏之於下、恐可記得。人傑。

史書もまた讀まねばならない。『通鑑』を讀むのはもちろんよいが、正史を一つ讀んでから『通鑑』を讀むべきだ。一代の帝紀では、大事ごとに大項目を立て、その間の小項目は下に分かち書きしていけば、恐らく憶えられるだろう。萬人傑記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 更逐件大事立箇綱目→更逐件事个綱目

(注) 「綱目」と、その下位分類としての「節目」という概念、及び大分類から小分類に進む學問の流れについては、下篇第43條の注を參照されたい。また、この條も、史書を讀む順序を論ずるのだが、「訓門人五」(一一七・2813)にも、次のようにある。「若只看通鑑、通鑑都是連長記去、一事只一處說、別無互見。又散在編年、雖是大事、其初却小、後來漸漸做得大。故人初看時不曾著精神、只管看向後去、却記不得、不若先草草看正史一過。正史各有傳、可見始末、又有他傳可互攷、所以易記。每看一代正史訖、却去看通鑑。亦須作綱目、隨其大事劄記某年有某事之類、準春秋經文書之。溫公亦有本朝大事記、附稽古錄後。」(「訓門人五」一一七・2813)

135 饒宰問看通鑑、曰、通鑑難看、不如看史記漢書。史記漢書事多貫穿、紀裏也有、傳裏也有、表裏也有、志裏也有。通鑑是逐年事、逐年過了、更無討頭處。道夫錄云、更無蹤跡。饒廷老曰、通鑑歷代具備。看得大概、且未免求速耳。曰、求速、却依舊不曾看得。須用大段有記性者、方可。且如東晉以後、有許多小國夷狄姓名、頭項最多。若是看正史後、却看通鑑、見他姓名、却便知得他是某國人。某舊讀通鑑、亦是如此。且草草看正史一上、然後却來看他。芝。

饒知事が『通鑑』を讀むことについて訊ねると、いわれ

た。「『通鑑』は讀みにくいから、『史記』『漢書』を讀む方がよい。『史記』『漢書』では書かれたことがらが全體に連關していて、「本紀」にもあれば、「列傳」にもあり、「表」にもあれば、「志」にもある。『通鑑』は、年ごとにことがらが記されており、その年が過ぎてしまえば、まったく手がかりがなくなる。」道夫の記錄には、「まったくたどる道筋が見えない」という。饒廷老が、「『通鑑』は、歷代のことがらが全て備わっていて、あらましを知ることはできますが、どうしても速さを求めるようになります」というと、（先生は）いわれた、「速さを求めていては、やはりわからないままだ。非常に記憶力のよい人なら可能だが。たとえば、東晉以後、おびただしい小國や夷狄の姓名が現れ、事項がたいそう多くなる。正史を讀んでから『通鑑』を讀めば、その姓名を見ても、すぐにそれがどこの國の人かわかる。私が昔『通鑑』を讀んだときも、このようにしたものだ。ともかく正史をざっと一通り讀み、それから『通鑑』を讀むのだ。」陳芝記す。

（校勘）朝鮮古寫本　本條を缺く

（注）饒宰（宰は知事のこと）、饒廷老、ともに饒幹のこと。田中謙二先生は、本條の記述から、當時既に彼が知事の職に在った、と考證される。（『師事年攷』續二八二）『宋元學案』卷六九「知軍饒先生幹」に「饒幹、字廷老、邵武人。淳熙進士。調知長沙縣、適朱文公爲守、先生夙與治事、暇卽聽講」とある。

「貫穿」は、一貫していること。讀書法上篇第96條に既出。

「討頭處」は、とっかかり、手がかりの意味。「……聖人說中人以下、不可將那高遠底說與他、怕他時下無討頭處。」（「論語十四　雍也篇三」三二・815）

「頭項」は、項目のこと。讀書法下篇第129條に既出。例を擧げる。「蓋爲學之事雖多有頭項、而爲學之道、則只在求放心而已。」（「論語二　學而篇上」二〇・446～447）、「而今若教公讀易、只看古注、幷近世數家注、又非某之本心。若必欲教公依某之易看、某底又只說得三分、自有六七分曉不得、亦非所以爲教。看來易是箇難理會底物事、卒急看未得、不若且未要理會。聖人云、詩、書、執禮、皆雅言也。看來聖人教人、不過此數者。公既理會詩了、只得且理會書。理會書了、便當理會禮。禮之爲書、浩瀚難理會、卒急如何看得許多。且如箇儀禮、也是幾多頭項。某因爲思得一策。不若且買一本溫公書儀、歸去子細看。看得這箇、不惟人家冠、昏、喪、祭之禮、便得他用。兼以之看其他禮書、如禮記、儀禮、周禮之屬、少間自然易、不過只是許多路徑節目。溫公書儀固有是有非、然他那箇大概是。」（「訓門人八」一二〇・2902）

「一上」は、一度、ひととおりの意。「一過」に同じ。これについては、前條の注に引いた「訓門人五」（一一七・2813）の記錄に例が見える。そこでは、「若只看通鑑、通鑑都是連長記去、一事只一處說、別無互見。又散在編年、雖是大事、其初却小、後來漸漸做得大。故人初看時不曾著精神、只管看向後去、却記不得、不若先草草看正史一過」と、史書を讀み、記憶する心得を『通鑑』を例にとって述べるなど本條と重なる點が多いのだが、引用部分の末尾にある通り、やはり本條と同じく「まずは正史をざっとひととおり讀むのがよい」と述べる箇所に「一上」ではなく「一過」を用いている。

『朱子讀書法』卷三「循序漸進」に「通鑑難看。不如看史記漢書。漢書事多貫穿。通鑑是逐年事逐年過了、更無蹤跡。某舊讀通鑑、且草看正史一上、却來看他」とある。

136 問、讀通鑑與正史如何。曰、好且看正史、蓋正史每一事關涉處多。只如高祖鴻門一事、本紀與張良灌嬰諸傳互載、又却意思詳盡、讀之使人心地懽洽、便記得起。通鑑則一處說便休、直是如法、有記性人方看得。又問、致堂管見、初得之甚喜。後見南軒集中云、「病敗不可言。」又以爲專爲檜設。豈有言天下之理而專爲一人者。曰、儘有好處、但好惡不相掩爾。曰、只如頭一章論三晉事、人多不以爲然。自今觀之、只是怕溫公爾。曰、誠是怕。但如周王不分封、也無箇出場。道夫。

「『通鑑』と正史はどのように讀めばよいでしょうか」と問うと、いわれるには、「まずよく正史を讀むことだ。正史は、事項ごとに關連するところがたくさんある。漢の高祖の鴻門の會ひとつをとっても、本紀と張良・灌嬰などの傳にこもごも記載されていて、內容が詳細に盡くされているので、それを讀めば、すんなり得心できて、よく憶えられる。『通鑑』はというと、一箇所で說けばそれでおしまいで、まったく型どおりだから、記憶力のある人でないと讀めない。」また、問うた。「胡寅の『讀史管見』は、手に入れたばかりの時は、とてもおもしろかったのですが、後に『南軒集』を見ると、『缺點だらけでお話にならない』といい、さらに、それが『專ら秦檜批判のために書かれたもので、天下の道理を論ずるのに、專ら一人の人物のことばかり扱うなどということがあろうか』と述べています。」おっしゃるには、「良い箇所があっても、好惡は隱しようもない、ということさ。」また、「ただ、最初の一章で三晉の

ことを論じているのは、あまり賛同する人はいません。いま考えると、司馬溫公に遠慮していたのですね」というと、いわれた、「確かに遠慮している。周王が封土を分割しなかった點については、出番はなかったようだね。」楊道夫記す。

（校勘）　朝鮮古活字本　讀之使人心地懽洽→讀之使人心地灌洽
朝鮮古寫本　問讀通鑑與正史如何→道大問讀通鑑與正史如何
曰儘有好處→道夫心疑之、先生曰儘有好處　曰只如頭一章→道夫曰只如頭一章　曰誠是怕→先生曰誠是怕　也無箇出場→也則無个出場
朝鮮刊本　祖→麤　又以爲專爲檜設→又以爲專爲檜說

（注）「直是如法」は、中華書局本では「直是無法」に作るが、他のテキストはすべて「直是如法」としているため、他本によって訂正した。同様に、「自今觀之、只是怕溫公爾」及び「誠是怕」の「怕」を、中華書局本は「祖」に作るが、やはりそのようなテキストは見當たらず、他の諸本によって改めた。

「懽洽」は「灌洽」に同じ、すみずみまでのびやかに滲み通ることを言う。上篇50條の注を參照のこと。

「致堂」は、胡寅の號。『宋元學案』卷四十一「衡麓學案武夷家學」に傳が見える。胡寅、字は明仲、崇安の人。「管見」は、胡寅の著書『讀史管見』三十卷のこと。

「胡致堂議論英發、人物偉然。向嘗侍之坐、見其數盃後、歌孔明出師表、誦張才叔自靖人自獻於先王義、陳了翁奏狀等、可謂豪傑之士也。讀史管見乃嶺表所作、當時並無一册文字隨行、只是記憶、所以其間有牴牾處。……」（「程子門人　胡康侯」一〇一・2581）

「胡氏管見有可删者。」（同上）

『南軒集』に見える『讀史管見』への批判とは、恐らく次の言を指すのであろう。「讀史管見當並、往近看此書、病敗不可言。其中間有好處、亦無完篇耳。看元來意思、多是爲檜設、言天下之理而往往特爲譏刺一夫。不亦溢目陋乎。編通鑑綱目極善。」（張栻『南軒文集』卷二十一「答朱元晦祕書」）

「三晉」は、春秋時代の韓・魏・趙を指す。

「出場」は出番のこと。

137　讀史當觀大倫理・大機會・大治亂得失。節。

史書を讀むには、大きな倫理（すじみち）・大きな機會（きっかけ）・大きな治亂得失を見なければならない。甘節記す。

（校勘）　朝鮮古寫本　冒頭に「楊至云云」の四字有り　大機會→大揔會

（注）　「大機會」は、この場合、歴史の重要な時機を指す。蘇軾の「范景仁墓志銘」に「速則濟、緩則不及、此聖賢所以貴機會也」とあるのは、本條と同じ用法である。

138　凡觀書史、只有箇是與不是。觀其是、求其不是。觀其不是、求其是。然後便見得義理。壽昌。

經書と史書を讀むには、是と非しかない。是を見たら、その非を求め、非を見たら、その是を求めるのだ。そうすれば、義理がわかる。吳壽昌記す。

（校勘）朝鮮古寫本　本條を缺く

（注）本條と同樣の發想による教えが、下篇78條に既に見えている。そこでは、まず疑いをもつように學び、疑いが生じれば次にその疑いがなくなるまで勵むようにする、と述べられる。

139　史且如此看讀去、待知首尾稍熟後、却下手理會。讀書皆然。

史書はともかくこんなふうに讀み進めていって、全體の首尾がだんだん分かってきたと感じたら、きちんと取り組むようにする。讀書とはみなそういうものだ。（記錄者名を缺く）

（校勘）朝鮮古寫本　本條を缺く

（注）「下手」は着手すること。下篇47條の注を參照のこと。「待～、却～」は、現代語の「等～、才～」に同じ。

140　讀史有不可曉處、劄出待去問人、便且讀過。有時讀別處、撞着有文義與此相關、便自曉得。義剛。

史書を讀んでいてわからないところがあれば、書き出して後で人に尋ねるようにしておき、ともかく讀み進めなさい。そのうち別の所を讀んでいて、そこと意味が關わる箇所に出くわせば、自然とわかってくる。黃義剛記す

（校勘）朝鮮古寫本　義剛→淳、義剛同

（注）「劄出」は、メモに書き出すこと。下篇96條に、經書と史書を比較し、經書を學ぶときには、史書のようにメモを取って濟ませることはできない、という議論がみえる。

「撞着」はぶつかる、出くわす。「且如讀書、讀第一章、便與他理會第一章、讀第二章、便與他理會第二章。今日撞著這事、便與他理會這事、明日撞著那事、便理會那事。萬事只是一理、不成只揀大底要底理會、其他都不管。」（「訓門人五」一一七・2822）

また、『朱子讀書法』卷二「虛心涵泳」に、「讀史有不曉處、劄出便且讀過去、有時讀別底、撞著文義與此相關、便自曉得」とある。

141　問讀史。曰、只是以自家義理斷之。大概自漢以來、只是私意、其間有偶合處爾。只如此看他、已得大概。范唐鑑

亦是此法、然稍疏。更看得密如他、尤好。然得似他、亦得了。端蒙。

史書の讀み方を尋ねると、いわれた。「自分の義理で判斷するしかない。およそ漢から後は、もっぱら私意ばかりで、なかにたまたま理にかなったところがあるにすぎない。このように讀むだけでも、すでにあらましはわかる。范祖禹の『唐鑑』もこのやり方だが、やや雜だ。彼よりも緻密に讀めば、りっぱなものだ。しかし彼ぐらいにやればまずまずだ。」程端蒙記す

（校勘）朝鮮古寫本　本條を缺く
朝鮮古活字本　問讀史→問觀史

（注）「范唐鑑」は范祖禹の撰にかかる『唐鑑』のこと。この書は、司馬光が『通鑑』を修し、范祖禹も編修官として唐史を擔當した際に得た資料をもとにして成ったという。歷代の主要な書目からその解題の部分を摘錄する。

「唐鑑十二卷　翰林學士成都范祖禹淳父撰。祖禹與修通鑑、分主唐史。元祐初上此書、攷其治亂興廢之由、爲三百六篇。」（『直齋書錄解題』卷四「編年類」）

「唐鑑二十卷　右皇朝范祖禹醇夫撰。醇夫爲溫公通鑑局編修官十五年、分掌唐史、以其所自得、著成此書。取武后臨朝二十一年繫之中宗、其言曰、此春秋公在乾侯之義也、雖得罪於君子、亦所不辭。觀此、則知醇夫之從公、決非苟同者。凡三百六篇。」（『郡齋讀書志』卷七「史評類」）

「二十四卷　宋范祖禹淳父撰、呂祖謙註。祖禹字淳父、華陽人、嘉祐八年進士。……初治平中、司馬光奉詔修通鑑、祖禹爲編修官、分掌唐史、以其所自得者、著成此書。上自高祖、下迄昭宣、撮取大綱、繫以論斷、爲卷十二。」（『四庫總目』卷八十八史部史評類）

また、『語類』では、學問のあり方を論ずる際にしばしば『唐鑑』が引き合いに出される。幾つか例を擧げてみよう。

「……范氏議論多如此、說得這一邊、便忘却那一邊。唐鑑如此處甚多。以此見得世間非特十分好人難得、只好書亦自難得。」（「論語十三　雍也篇二」三一・793）

「……大抵范氏說多如此、其人最好編類文字、觀書多匆遽、不仔細。好學而首章、說得亂董董地、覺得他理會這物事不下。大抵范氏爲人宏博純粹、却不會研窮透徹。如唐鑑、只是大體好、不甚精密、議論之間、多有說那人不盡。如孫之翰唐論雖淺、到理會一事、直窮到底、教他更無轉側處。」（「論語二十六　憲問篇」四四・1132）

「范淳夫純粹、精神短、雖知尊敬程子、而於講學處欠缺。如唐鑑極好、讀之亦不無憾。」

「范淳夫說論語較粗、要知却有分明好處。如唐鑑文章、議論最好。不知當時也是此道將明、如何便教諸公都恁地白直。某嘗

看文字、見說得好處、便尋他來歷、便是出於好人之門。」（以上「本朝四　自熙寧至靖康用人」一三〇・3105）

「致堂管見方是議論、唐鑑議論弱、又有不相應處。前面說一項事、末又說別處去。」

「唐鑑欠處多、看底辨得出時好。」

「范唐鑑第一段論守臣節處不圓。要做一書補之、不曾做得。范此文章草之甚。其人資質渾厚、說得都如此平正。只是疏、多不入理。終守臣節處、於此亦須有些處置、豈可便如此休了。如此議論、豈不爲英雄所笑。」（以上「歷代一」一三四・3207～3208）

「如」は「于」に同じ。「～よりも」の意。

「得了」は、「まずまずよい」という意味。『祖堂集』巻十八に、「又問、某甲聞與不聞、若問某甲聞與不聞、問取樹子聞與不聞、始得了也。」とある。

142　讀史亦易見作史者意思、後面成敗處、他都說得意思在前面了。如陳蕃殺宦者、但讀前面、許多疏脫都可見了。甘露事亦然。賀孫。

史書を讀めば、史書を著した人の考えがよくわかる。のちの成敗の始末は、著者はその考えを前の方ですっかり語っている。陳蕃が宦官を殺そうとした事件も、前の方を讀んだだけで、多くのへまが丸見えだ。「甘露」事件もそうだ。葉賀孫記す

（校勘）朝鮮古寫本　殺宦者→殺官者

（注）「疏脫」は、てぬかりのあること。「……但張公才短、處事有疏略處。他前後許多事、皆是竭其心力而爲之。少有照管不到處、便有疏脫出來。」（「本朝五　中興至今日人物上」一三一・3149）

「陳蕃殺宦」とは、いわゆる「黨錮之禍」にまつわる事件で、『後漢書』「陳蕃列傳」や「竇武列傳」に記事が見える。

「……中常侍曹節、王甫等與共交搆、譖事太后。太后信之、數出詔命、有所封拜、及其支類、多行貪虐。蕃常疾之、志誅中官、會竇武亦有謀。……及事泄、曹節等矯詔誅武等、蕃時年七十餘、聞難作、將官屬諸生八十餘人、並拔刀突入承明門。」（陳蕃列傳）

「武既輔朝政、常有誅翦宦官之意、太傅陳蕃素有謀。時共會朝堂、蕃私謂武曰、……」（竇武列傳）

「甘露事」とは、唐の文宗の時、李訓・鄭注らが、石榴の木に甘露がおりたと僞って宦官を殺そうとした事件を指す。『舊唐書』文宗紀下に「九年……十一月……壬戌、時李訓・鄭注謀誅內官、詐言金吾杖舍石榴樹有甘露、請上觀之。內官先至金吾杖、見幕下伏甲、遽扶帝輦入內、故訓等敗、流血塗地。京師大駭、旬日稍安」、『新唐書』李訓傳には、「十一月壬戌、帝御紫

宸殿、約奏甘露降金吾杖樹、群臣賀、訓、元輿奏言、甘露近在禁中、陛下宜親往以承天祉。許之。卽輦如含元殿、詔宰相群臣往視、還、訓奏言、非甘露。帝曰、豈約妄邪。……」と記事がみえる。また、これら後漢・唐代の宦官にまつわる大事件を比較する言説としては、「歷代二」（一三五・3232）の「唐宦官與東漢末如何。曰、某嘗說、唐時天下尙可爲。唐時猶有餘策、東漢末直是無著手處、且是無主了。如唐昭宗文宗、直要除許多宦官。那時若有人、似尙可爲。那時只宣宗便度得事勢不能諫、便一向不問他、也是老練了如此。……」が擧げられる。

143　問芝、史書記得熟否。蘇丞相頌看史、都在手上輪得。他那資性直是會記。芝曰、亦緣多忘。曰、正緣如此、也須大約記得某年有甚麼事、某年有甚麼事。纔記不起、無緣會得浹洽。芝云、正緣是不浹洽。曰、合看兩件、且看一件、若兩件是四百字、且二百字、有何不可。芝。

わたくし（陳芝）に尋ねられた、「史書はしっかり憶えたかね。蘇頌丞相は史書を讀むのに、いつも書物を手にしておられた。彼は天性まったく記憶力のよい人だった。」わたくしはいった。「やはり忘れやすいからでしょう。」いわれるに、「そうであればこそ、やはり大體どの年に何が有り、どの年に何が有ったかを憶えておかねばならない。憶えられなければ、しっくり理解のしようがない。」わたくしはいった。「まさにそのしっくり理解しようがないからなんです。」いわれた。「ふたつ讀むべきなら、まず一つを讀む。二つで四百字のところを、まず二百字、それならできないことはなかろう。」陳芝記す。

（校勘）朝鮮古寫本　本條を缺く

（注）「蘇丞相頌」は、蘇頌のこと。字は子容、泉州南安人。本條と同趣旨で、讀む分量の半分づつ片付けていくことを勸める條として、上篇39・40條が擧げられる。また、「讀書法上」に、「如會讀得二百字、只讀得一百字、却於百字中猛施工夫、理會子細、讀誦教熟。如此、不會記性人自記得、無識性人亦理會得」（一〇・165）、「讀書不可貪多、且要精熟。如今日看得一板、且看半板、將那精力來更看前半板、兩邊如此、方看得熟。直須看得古人意思出、方好。」（一〇・166）と、本條に相通ずる訓えがある。

「輪得」は、手中に弄ぶこと。

144　人讀史書、節目處須要背得、始得。如讀漢書、高祖辭沛公處、義帝遣沛公入關處、韓信初說漢王處、與史贊過秦

論之類、皆用背得、方是。若只是略綽看過、心下似有似無、濟得甚事。讀一件書、須心心念念只在這書上、令徹頭徹尾、讀教精熟、這說是如何、那說是如何、這說同處是如何、不同處是如何、安有不長進。而今人只辦得十日讀書、下着頭不與閑事、管取便別。莫說十日、只讀得一日、便有功驗。人若辦得十來年讀書、世間甚書讀不了。今公們自正月至臘月三十日、管取無一日專心致志在書上。又云、人做事、須是專一。且如張旭學草書、見公孫大娘舞劍器而悟。若不是他專心致志、如何會悟。

史書を讀むときは、重要な節目の箇所は暗記しなくてはならない。例えば、『漢書』を讀むには、高祖が沛公を辭退するくだり、義帝が沛公を關中に遣わすくだり、韓信が初めて漢王に說くくだりは、史贊の過秦論の類と共に、みな暗記してこそよい。もしいい加減に讀み過ごして、記憶にあるのやらないのやらわからぬようでは、何の役に立とうか。ひとつの書物を讀むには、心をこめてひたすらその書物に集中し、最初から最後まで、徹底的に理解が熟するまで讀み、この說はどうか、あの說はどうか、この說と同じ所はどうか、違う所はどうかと考えていけば、大きく進歩しないはずがない。いま、たった十日ほどの讀書でも、一心不亂にわき目もふらずにやったなら、きっと見違えるようになる。十日といわず、一日讀むだけでも、效果はめざましいだろう。（こんな風に）十年あまり讀書したなら、世の中に讀みきれない本などなくなるはずだ。いまあなた方は、正月から大晦日まで、集中して思いをこらして讀むことなど一日だってないに違いない。」またいわれた、「人が何かをなすには、專一を旨とせねばならない。例えば、張旭が草書を學ぶのに、公孫大娘の劍（つるぎ）の舞いを見て悟ったようなもので、もし彼が集中して思いをこらさなかったら、どうして悟れただろうか。」（記錄者名を缺く）

（校勘）朝鮮古寫本　本條を缺く
朝鮮古活字本　略綽→略踔、公們→公門

（注）「高祖辭沛公處」は、秦二世元年九月、沛の父老に沛公となるよう求められ、幾度も辭する場面をいう。續く「義帝遣沛公入關處」、「韓信初說漢王處」とともに、記事は、『漢書』高帝紀上に見える。

「諸父老皆曰、平生所聞劉季奇怪、當貴、且卜筮之、莫如劉

季最吉。高祖數讓。衆莫肯爲、高祖乃立爲沛公。祠黃帝、祭蚩尤於沛廷、而釁鼓旗、幟皆赤、由所殺蛇白帝子、殺者赤帝子故也。於是少年豪吏如蕭・曹・樊噲等皆爲收沛子弟、得三千人。」（「高祖辭沛公處」）

「初、懷王與諸將約、先入定關中者王之。當是時、秦兵彊、常乘勝逐北、諸將莫利先入關。獨羽怨秦破項梁、奮勢、願與沛公西入關。懷王諸老將皆曰、項羽爲人慓悍禍賊、嘗攻襄城、襄城無噍類、所過無不殘滅、且楚數進取、前陳王、項梁皆敗、不如更遣長者扶義而西、告諭秦父兄。秦父兄苦其主久矣、今誠得長者往、毋侵暴、宜可下。項羽不可遣、獨沛公素寬大長者。卒不許羽、而遣沛公西收陳王、項梁散卒。乃道碭至城陽與杠里、攻秦軍壁、破其二軍。……（秦二世三年）八月、沛公攻武關、入秦、秦相趙高恐、乃殺二世、使人來、欲約分王關中、沛公不許。九月、趙高立二世兄子子嬰爲秦王。子嬰誅滅趙高、遣將將兵距嶢關。沛公欲擊之、張良曰、秦兵尚彊、未可輕。願先遣人益張旗幟於山上爲疑兵、使酈食其・陸賈往說秦將、啗以利。秦將果欲連和、沛公欲許之。……沛公引兵繞嶢關、踰蕢山、擊秦軍、大破之藍田南。遂至藍田、又戰其北、秦兵大敗。」（「義帝遣沛公入關處」）

「韓信爲治粟都尉、亦亡去、蕭何追還之、因薦於漢王、曰、必欲爭天下、非信無可與計事者。於是漢王齊戒設壇場、拜信爲大將軍、問以計策。信對曰、……」（「韓信初說漢王處」）

「史贊」は「高帝紀」末尾に付される散文の贊と、敍傳に見える韻文の贊（『文選』にいう史述贊）の雙方を指すのであろう。「過秦論」は『漢書』「陳勝項籍傳」の贊にみえる。なお、班固の「述高帝紀第一」は『文選』卷五十に、賈誼の「過秦論」は、『文選』卷五十一に收められている。

「略綽」は、おざなりなこと。上篇49條の注を參照のこと。

「心心念念」は、一心不亂に常に考えること。「若說在內、譬如自家自在自屋裏作主、心心念念只在這裏、行也在這裏、坐也在這裏、睡臥也在這裏。」（「論語十三　雍也篇二」三一・790）

「動詞＋得」で、その動作を行うだけの能力を有することをいう。例えば、「背得」「讀得」など。現代漢語の可能補語の一形態に通ずる。「辦得」は「しきる、やりきる」。「只是他那工夫大段難做、除非百事棄下、辦得那般工夫、方做得。」（「性理一　人物之性氣質之性」四・80）

「下着頭」は、上篇31條の注を參照のこと。

「管取」は、保證すること。轉じて、きっと、必ず。『古今小說』卷三十九に「今指引到一箇去處、管取情投意合、有箇小小富貴。」

「別」は、衆と異なって優れていること。

「專心致志」は、『孟子』告子篇上の「今夫奕之爲數、小數也、不專心致志、則不得也」を踏まえる。

「張旭學草書」は、『新唐書』卷二〇二「文藝傳中　李白傳」に付される次の逸話をいう。「文宗時、詔以白歌詩、裴旻劍舞、張旭草書爲三絕。旭、蘇州吳人、嗜酒、每大醉、呼叫狂走、乃

下筆、或以頭濡墨而書、既醒自視、以爲神、不可復得也、世呼張顛。初、仕爲常孰尉、有老人陳牒求判、宿昔又來、旭怒其煩、責之。老人曰、觀公筆奇妙、欲以藏家爾。旭因問所藏、盡出其父書、旭視之、天下奇筆也、自是盡其法。旭自言、始見公主擔夫爭道、又聞鼓吹、而得筆法意、觀倡公孫舞劍器、得其神。後人論書、歐・虞・褚・陸皆有異論、至旭、無非短者。傳其法、惟崔邈・顏眞卿云。」

また、杜甫「觀公孫大娘弟子舞劍器行序」にも、「昔者吳人張旭、善草書書帖、數嘗於勤縣見公孫大娘舞西河劍器、自此草書長進、豪蕩感激。卽公孫可知矣。」とあり、この故事が廣く滲透していたことが分かる。

なお、本條の「讀一件書」から「便有功驗」までが、『朱子讀書法』卷三「熟讀精思」に見え、「人若辦得十來年讀書、世間甚書讀不了」として、卷四「若緊用力」に見える。

145 楊志之患讀史無記性、須三五遍方記得、而後又忘了。曰、只是一遍讀時、須用功、作相別計、止此更不再讀、便記得。有一士人、讀周禮疏、讀第一板訖則焚了、讀第二板則又焚了、便作焚舟計。若初且草讀一遍、準擬三四遍讀、便記不牢。又曰、讀書須是有精力。至之曰、亦須是聰明。曰、雖是聰明、亦須是靜、方運得精神。昔見延平說、『羅先生解春秋也淺、不似胡文定。後來隨人入廣、在羅浮山住三兩年、去那裏心靜、須看得較透。』淳錄云、那裏靜、必做得工夫有長進處。只是歸來道死、不及叩之。某初疑解春秋、干心靜甚事、後來方曉。蓋靜則心虛、道理方看得出。義剛曰、前輩也多是在背後處做幾年、方成。曰、也有不恁地底。如明道自二十歲及第、一向出來做官、自恁地使好了。義剛。

楊至之は、史書を讀むのに記憶力がなく、三回も五回も讀んでやっと憶えても、後でまた忘れてしまうのに惱んでいた。そこで言われるには、「最初讀むときに一生懸命やって、けりをつけるつもりで、これきりもう讀まないことにすれば憶えられるさ。ある士人は、『周禮』の疏を讀むのに、一頁目を讀み終えたらそれを燃やし、二頁目を讀み終えたら、またそれを燃やしという具合に、船を燃やして退路を絶つ戰法を取っていた。もしも最初にいい加減に讀んでいたら、あと何回讀もうが、しっかりとは憶えられない。」またおっしゃった。「讀書するには精神力がなければならない。」至之がいった。「聰明さも必要でしょう。」それに對していわれた。「聰明であっても、心が靜まっていて

こそ精神を働かせることができるのだ。以前李延平先生がいわれることに、『羅仲素先生が春秋を解釋されても底が淺く、胡文定のようなわけにはいかなかった。のちに人について廣東に入り、羅浮山に二三年滯在されたのだが、そこに行ってからは心が靜まり、理解がかなり透徹するようになったはずだ。』陳淳の記錄にはいう。「あそこで心を靜めて、きっと努力して大きく進歩されただろう。ただ歸る途中で亡くなられたので、それを確かめることはできなかったが。」私は當初、春秋を理解するのに、心を靜めてどうなる、と思っていたが、あとでやっとわかった。靜まれば心は虛になり、始めて道理が見えてくるのだ。」わたくし（黃義剛）がいった。「先人も、多くは世間から離れて何年も努力して學問が成ったのですね。」いわれた。「そうでない人もあるさ。例えば、程明道などは、二十歳で科擧に及第してから、ずっと表舞臺で官途に就いていたが、おのずとああやってうまくできた。」黃義剛記す。

（校勘）朝鮮古寫本　楊志之→楊至之、三四遍→三五遍、曰→先生曰、後來→後因、延平說羅先生→羅密、淳錄云～叩之→缺、某初疑解春秋→某初疑道春秋、自二十歲→自是二十歲、自恁地→也自恁地

朝鮮古活字本　楊志之→楊至之

（注）「楊志之」は中程に「至之」とあるように、「楊至之」が正しい。弟子楊至の字。『師事年攷』165。

「作焚舟計」の「焚舟」は、退路を絶つことで、「秦伯伐晉、濟河焚舟。杜預注、示必死也」（『左傳』文公三年）の故事を踏まえる。「作～計」で、「～の手法・戰略を取る」という意味になる。また、「總論爲學之方」（八・137）に、「且如項羽救趙、既渡、沈船破釜、持三日糧、示士必死、無還心、故能破秦」とあるのも、同じ訓えを弟子に述べた例である。

「準擬」は、現代語の「打算」に同じ。上篇97條に既出。

「延平」は朱子の師であり岳父でもあった李侗のこと。下篇106條の注、また、「羅氏門人李愿中」（一〇三・2600～）を參照のこと。

「羅先生」は、羅從彥、字仲素（1072～1135）のこと。李侗の師として知られる。南劍の人。『宋元學案』卷三九「豫章學案」に、「官滿、入羅浮山靜坐。紹興五年卒、年六十四。學者稱豫章先生。又有春秋、毛詩、語孟解、中庸說、議論要語、臺衡錄、春秋指歸」と見える。『語類』には、卷一〇二に「楊氏門人羅仲素」が立てられ、その『春秋』への理解を評する、「李先生言、羅仲素春秋說、不及文定。蓋文定才大、設張羅落者大」（「楊氏門人　羅仲素」一〇二・2596）の如き言が見える。

一方、羅從彥が羅浮山にこもった逸話と彼の春秋說とは、關連づけて論じられることが多いようである。本條とほとんど同じ內容で記錄者の異なる說としては、次のようなものが擧げられる。「嘗見李先生說、舊見羅先生說春秋、頗覺不甚好。不知到羅浮靜極後、又理會得如何。某心常疑之。以今觀之、是如此。蓋心下熱鬧、如何看得道理出。須是靜、方看得出。」「舊見李先生云、初問羅先生學春秋、覺說得自好。後看胡文定春秋、方知其說有未安處。又云、不知後來到羅浮山中靜極後、見得又如何。某頗疑此說、以爲春秋與靜字不相干、何故須是靜處方得工夫長進。後來方覺得這話好。」（ともに「羅氏門人　李愚中」一〇三・2602）

「胡文定」は胡安國のこと。前出136條の注を參照のこと。

「干～甚事」は、何になる、何にもならない、等の意の口語。

「背後處」は、世間から離れたところ。

『朱子讀書法』卷二「居敬持志」に本條の冒頭から「道理方看得出」までと同じ記錄が見える。そこでも、記憶力の無さを訴える人物は楊志之ではなく、楊至之となっている。

譯注者後記　本稿作成の過程で、吉川雅之、濱田麻矢、高塚あゆみの諸君による譯注の草稿を參照した。謝意を表する。